

第 28 回「男らしさ、について考える」(2012/12/19)

場所：スペインバル リリオ（品川）

司会、文責：野田

参加者：18人

要約：男らしさは、周りからの認識であるという観点と、無理をしない、自然の姿であるという観点から議論しました。両者にギャップがあるときに、辛さが生まれる。

内容：

1. らしさとは（司会の提案で、まず肩慣らしとして「らしさ」について議論しました。）
 - ・ 形容詞は「素晴らしい」のように、「らしい」で終わっているものが多い。「～らしい」は、対象そのものの特徴が良く表れていることを示す。形容詞・形容動詞の後について名詞として扱われる「さ」が「～らしい」について、「らしさ」が構成される。
 - ・ 本来の姿をしていること。
 - ・ 無理をしない、自然の姿をしていること。
 - ・ あるべき姿をしていること。
 - ・ 他人が見て、あるべき姿はどうであるかを定めるルールを想定して、そのルールにあてはまっていること。
 - ・ 「っぽい」との違いがある。らしいは基本的に肯定的に使う。っぽいは肯定的にも否定的にも使う。「子供らしい」は子供だけに使い、子供でない大人には使わない。逆に「子供っぽい」は子供には使わず、大人だけに使う。
2. 男らしさについて
 - ・ 気は優しくて力持ち。器が大きいこと。細かいことを追及しない。弱いものを守る強さ。
 - ・ バックにあるのが、権力や攻撃力。
 - ・ 女性は守る力、防御力。
 - ・ 武士の切腹に見られる潔さ。
 - ・ 男っぽさは、粗野など、男のよくない性質を表すことがある。例えば男っぽい女性。
 - ・ 以上のイメージはそもそも社会的に刷り込まれたものであって、社会によって異なる。社会の変化によって新しい男らしさといったものが出来る。
 - ・ どうやって、社会の中で男らしさのイメージが共有されるのか。そもそも「男」という概念はどうやって形成されるのだろうか。先天的で、社会には無条件で存在するのか、または社会における経験等を通じて醸成される後天的、社会に制約的で存在するのか。
 - ・ 社会の中で、他者と触れ合う経験から帰納法的にイメージが共有される場合と、概念から演繹法的にイメージが作り出される場合がある。
 - ・ 男女に二分するというのが分け方として大まかであるため、漠然としたものにならざるを得ない。昔は社会的性別に従って、役割の分担が明確にあった。現在は女性が社会進出してきて、役割分担が曖昧になったことでなお一層、男らしさに敏感になって、より

偶像化されてきている。

- 先天的であれ、後天的であれ、自分を支える実存（主体的なあり方）であるならいいのではないか。
- 性同一性障碍の方は、自分が本来の性だと感じている性と、肉体の性が異なり、社会が肉体の性を基準に社会的な性すらも押し付けてくるため、そのギャップに苦しむ。他者から見える性別（肉体の性）は見て分かるが、自分が感じる性は他者には分からない。この障碍の方は、自分が感じている性を社会的な性に合わせたいと願っても、社会がその人の社会的な性を肉体の性を基準に判断するため、違和感がある。他者に自分が感じる性を理解してもらいたいと思っている。

このほかに、何故男女が求め合うのか、男に対して使う、男の持つ、良くない性質を示す言葉がないように思われるという、その場では深められなかったが興味深い話題が出ました。機会があれば取り上げたいと思います。白熱した議論になることを心配していましたが、予想が外れました。会後の懇親会で参加者の数人にインタビューしたところ、どうも「男らしさ」について普段意識することは少なく、死語になりつつあるようでした。但し、職場での上司の頼もしさについては、男らしいと感じるようです。